

日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書

早川基金による旅費の援助を受けて 2000 年 3 月 20 日～3 月 31 日にドイツを訪問し、2 つの国際研究会に出席した。今回の研究会出席の主な目的は、昨年度に予算が認められて計画が本格的にスタートした VERA 計画の国際的な宣伝にあり、どちらの研究会においても VERA 計画に関するポスター発表を行った。以下に研究会の様子を中心に今回の渡航について簡単に報告する。

まず、3 月 20 日～24 日にハイデルベルクで開かれた国際研究会「Dynamics of Star Cluster and the Milky Way」に出席した。本研究会では、球状星団や銀河系の力学構造に関する研究者 150 名程度が参加し、理論、観測の双方について最新の結果が数多く報告された。中でも特に興味深かった発表を 3 つあげると、1) HST による球状星団内の星の固有運動測定、2) HDF (Hubble Deep Field) 内の高速度星の検出、3) 銀河系中心核周辺の星の加速度検出、があげられる。これらの研究について特筆すべきことは、いずれも位置天文学的手法による固有運動測定をベースにしているという点である。これらの発表を聞いて、高精度位置天文観測の持つ大きなポテンシャルを改めて認識させられた。また、ドイツが計画中の位置天文衛星 DIVA の中心的なメンバーと議論の時間をもつことができ、お互いの計画について紹介しあうとともに、DIVA を用いた光による位置天文観測と VERA を用いた電波での位置天文観測のリンクについて将来的な共同研究の可能性も議論することができた。

その後は、3 月 27 日～31 日にミュンヘンで開かれた SPIE 国際シンポジウム「Astronomical Telescopes and Instrumentation 2000」に参加した。この研究会は、望遠鏡や検出器などの観測装置を主なテーマとする研究会で、当方は「Radio Telescope」と



研究会「Dynamics of Star Cluster and the Milky Way」のレセプションにて

いう分科会でポスターを掲示したが、同時に光学望遠鏡などの他の分科会にも積極的に参加した。特に印象深いのは、KECK や VLT などの大型望遠鏡を用いた光干渉計に関する発表が多数あったことで、実際にこれらの望遠鏡を用いて光干渉計観測が行える日もそう遠くない、というのが率直な印象であった。また、FAMA や SIM, GAIA といった光干渉計衛星計画に関する発表も多くあり、10 年以内に光干渉計による高精度位置天文観測の時代がくることを再認識させられ、日本が有する数少ない高精度位置天文観測装置の一つである VERA の持つ責任の大きさも改めて感じた。今後は、今回の渡航で認識した国際情勢を踏まえ、国際競争の中で VERA が大きな科学的成果をあげられるよう努めていきたい。

この度は早川基金による海外渡航援助をいただきどうもありがとうございました。お陰様で 2 つの連続する国際研究会に出席することができ、天文学研究の最新情報が数多く得られると共に、海外の多くの研究者と有意義な議論を持つことが出来ました。このような貴重な体験を可能にしてくださいました早川基金と関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

本間希樹 (国立天文台 COE 研究員) *所属機関は申請当時